

---

# 義妹は生徒会長！【更新停止中】

羽賀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義妹は生徒会長！【更新停止中】

### 【Nコード】

N5416F

### 【作者名】

羽賀

### 【あらすじ】

学園のアイドルかつ生徒会長である美少女、神楽坂観月。苗字は違えど彼女は俺の義妹で。そしてなおかつブラコンで！お兄ちゃん大好きっ娘と、義妹への対応にほとほと困り果てる主人公、そして観月を愛してやまないKFC 神楽坂観月ファンクラブ との三つ巴の妹系乱戦ラブコメディ！ 途中から誇張表現が入りました。

## ブローグ

「それでは生徒会長、神楽坂観月かぐらざかみつきからの挨拶です！」

全校生徒が直立し、水をうつたように静まりかえっていた体育館が、一気に沸いた。

司会の横を通り、ゆつくりと壇上へ歩みを進める生徒会長。

彼女がステージ中央に設置されたマイクに近づくにつれ、生徒たちの声はより一層大きくなる。

体育館の中、旗が翻る。『神楽坂観月ファンクラブ』と白抜きされ、何人かの有志によって振られるそれを見て、壇上の生徒会長は薄く微笑んだ。

同時に何人かの生徒がばたたと倒れる音。貧血を起こしたのか、それとも会長の笑みに魅せられたのか。答えは明白だ。

マイクの正面に立つ女子生徒、この黎桜学園生徒会長の神楽坂観月は、小さく息を吸って口を開いた。

「皆さん、おはようございます」

体育館全体が、歓声に覆われた。

「今日の生徒総会ですが、議題は本年度予算案について」

歓声を浴びつつ、観月は会長としての責務を全うするべく言葉を続ける。だがその間にも「かいちよー!」「観月さん!」「女神が舞い降りたああ!」などといった観月を讃え、奉るような声が飛び交っていた。

けれど観月はそんな事で動じはしなかった。日常茶飯事、すでに

観月の日常として認識されているからだ。

改めて言うが、黎桜学園生徒会長、神楽坂観月の人気は非常に高い。ある種アイドルである。

彼女の人気のはそれこそ入学時から始まる。

稀代の美少女、黎桜に降臨せり。

一本一本が艶やかで色素の薄い髪。サイドは編まれて後頭部へと向かい、腰ほどまでの長さがある。

目鼻立ちはこれでもかと言うほど整っており、見る者に感嘆の溜息を吐かせた。

身体も見事なまでに均整がとれており、女性としての魅力は十二分に詰まっている。

総合的に見て、どう考えても美少女の格印が押される彼女だが、美人にありがちな人を遠ざけるような雰囲気などはなかった。

むしろ、彼女は人を呼び、集めるような絶対的な魅力を有しているのだ。

入学式の翌日から、黎桜学園は沸いた。老若男女入り乱れて一年生の教室へ、彼女を一目見ようと押しかけた。

同じクラスの生徒は優越感に浸り、隣のクラスやほかのクラスの生徒は偶然自分が観月と同じクラスにならなかった確率を恨んだ。

新聞部は彼女の美しさを説き、文芸部は彼女をモデルに純愛ラブロマンスを執筆。一度彼女の応援を受けた運動部は県大会優勝を成し遂げるなど、彼女の影響力は恐ろしい物になっていた。

当然ファンクラブは出来る。会員は男子だけでない、女子もだ。神楽坂観月は女子からの人望も篤い。

また、運動神経も抜群で、助っ人として参加した女子バスケット部の大会で最優秀選手賞を取った事もある。

頭脳も言わずもがな。全国模試では常に一桁台にその名を連ねる猛者である。

そんな彼女には、だが一つだけ秘密があつた。  
彼女の視線の先を追えば誰でもわかるだろう。

二年生、観月と同じ学年のとある男子生徒に、その視線は注がれていた。

他の生徒のように観月に狂う事のない、不思議な生徒だ。  
けれど理由は簡単である。

神楽坂観月と、少年  
榊吉野は、義理よぎよしのとも言えども兄妹の間柄なのだ。

## 第一話

「今日の会長も素敵だったねー」

「いつ見ても綺麗で可愛いよねえ」

生徒総会は終わり、生徒たちはお互いに会話に華を咲かせつつ教室へと戻る。

話題に挙がるのは当然のことながら生徒会長である観月の事だ。壇上での彼女の凛とした姿。それを思い出したのか、皆興奮したような面持ちで語らう。

そんな生徒たちには混じることなく、榊吉野は教室への道を歩いていた。

「……相変わらず凄い人気だよ」

軽く息を吐きつつ、隣を歩く同級生の話に聞き耳を立てる。

その会話は観月の賞賛から始まり観月の賞賛で終わらんばかりの勢いだった。

改めて義妹のアイドル性、そして人気を実感し、吉野は肩を竦めた。

「なあにやってんだよ榊」

「うおっ」

竦めていた肩にずしりと重い感触。吉野の肩に腕が回される。

振り返れば悪友、三井恵祐が白い歯を見せて豪快に笑っていた。だがその顔は興奮のためか上気している。

「どうしたんだ？」

「どうしたも何も、お前はなぜ神楽坂さんの魅力を語ろうとしないんだ？ ええ？」

聞くと、不思議そうな顔で質問を返される。

確かに、周りの生徒たちがこれだけ観月に熱を上げている中、一人だけそれに混じらないのであれば浮いて見えてしょうがないだろう。

「彼女の魅力は十分にわかってるつもりなんだけども……」

「だったらお前も語ろうぜ、彼女の魅力！」

「は、はは……」

吉野としては苦笑するしかなかった。

自分は誰よりも観月の魅力を知っている。……そう自負している。なぜなら自分と彼女は兄妹の間柄だからだ。黎桜学園の生徒たちが知り得ない彼女の魅力を知っているのは自分だけだろう。

だからこそ吉野は自分の妹をアイドル視するなんて事は出来ないのだ。

彼女は妹であり、大事な家族である。他の生徒たちと違い、彼にとって観月は手の届かない存在というわけではない。

つまり、吉野が彼女の魅力を語ろうとしないのは観月を近くで見すぎている事に原因がある。

「と、とりあえずやめておくよ……」

「そうか？ まあ無理強いはいしないけどよ」

こんな時、引き際を知っている友人は本当に素晴らしい。吉野は心の中で恵祐を絶賛した。

でも願わくば金輪際俺に観月の話題を振らないでくれ。

戻ってきた教室はどこか落ち着きがなかった。理由は当然ながら観月なのだが。

彼女は吉野や恵祐と同じ、二年C組に在籍している。

みんなよくやるよなあ、と心の中で感嘆しつつ、吉野は自席窓際一番後ろの席に腰掛けた。瞬間、数人の視線が吉野に突き刺さる。

彼の前の席。丁寧に整頓された教科書が見て取れる机の横に提げられた鞆には『神楽坂観月』のネームが入っている。

つまり吉野は観月に最も近い席に座っていると言っても過言ではないのだ。観月の前席や隣の席も彼女と近いと言えるのだが、吉野に殺気に近い視線を向けてくる連中はそれに気付いていないらしい。

「……心が安まる暇がねえ」

あまりに人気がありすぎるのも考えすぎだぞ、とここにはいない観月に言ってみた。

「も、戻ってきたぞ!」

しばらくしてから、一人の生徒が唾を飛ばさんばかりの勢いで報告した。

報告を聞いた二年C組の生徒たちはあたふたと教室内を駆けずり回る。

箒を手に掃除を始める者、机の列を整頓する者、笛を吹き隊列を整えさせる者。

全ての準備が終わり皆が自席に着いた時、教室の扉が開き、観月が姿を現した。



「ふう、やつとお仕事終わったよー」

腕を伸ばし、伸びの体勢をしながら自席へと向かう観月。背を反らしているせいか、体の線が浮き彫りになる。

男子は鼻の下を伸ばし、女子はそのスタイルの良さに驚嘆し、羨望の眼差しを向けた。けれど誰一人として負の感情を抱く生徒などいない。

「みんな、話長かったでしょ？ ごめんね」

ちろっ、と舌を出して手を胸の前で合わせる謝罪のポーズ。狙ってやっているのならともかく、彼女の場合は天然でこれやるから恐ろしい。

数人の男子は鼻から鮮血を噴射して果てた。

「な、長くなかなかったよ！」

「そうそう！ 神楽坂さんの声を聞けるだけで、私、私……」  
「もつと話してくれてもよかったんだぜ！？ な、みんな！」

必死にフォローを入れる二年C組一同（ただし吉野を除く）。

彼らにありがとう、と鈴を転がすような声で感謝の意を述べ、観月は席に着いた。

彼女はいそいそと机の中の教科書を鞆に詰め込み始めた。あと五分でSHRが始まり、それが終われば放課後なのだ。

ある程度詰め終わり、最後に筆箱を入れようとした時、筆箱から消しゴムが転がり落ちた。筆箱のチャックが締まっていなかったのだろう。

消しゴムはコロコロと転がり、そして吉野の足下で静止した。

「ん。よいしょ、っと。はいよ」

「……あ、ありがとう」

手渡しで消しゴムを渡してやると、観月は顔を赤くして俯いた。そんな反応に困り、頬を掻く吉野。

まさしく青春のページと言っても過言ではないだろう。ちなみに周囲の生徒たちの目は半ば殺気立っている。

そんな視線に気がついた吉野が胃の痛みに耐えきれなくなった頃、ようやく教師が現れて放課後となった。

放課後の教室に生徒たちの姿はあまり見られなかった。

いるのは吉野と恵祐、そして数人の女友達と楽しそうに談笑する観月だけだ。

「……ふう、疲れた」

ちらちらと観月を横目で見つつ、自らの机の上に座る吉野は呟いた。

この学園生活、一時も心休まる時がないのは如何なものだろうか。

「疲れたって何がだよ」

「全部」

同じく観月の事をちらちらと見ている恵祐が口を開いた。

観月は楽しそうに女友達との会話に興じている。

「お前な、さつきから何神楽坂さんの事ちらちら見てんだ？」

「その台詞、そのままそっくりお前に返す」

恵祐の言葉に続けて吉野が返す。

兄としては、妹が少しばかり気になってしょうがないのだ。  
いじめられていないか、とか、何か不自由な事はないか、とか。  
観月に限ってそれはあり得ないが。

むしろ自分の心配をすべきである。

「言っておくがな、神楽坂さんに告白しよう、なんて馬鹿な事考えるなよ」

話題が切れて寂しいのか、恵祐が口に出した。

その瞳の色、そして口調は真剣そのものであった。

「……いや、しないけど。何で？」

「我々神楽坂観月ファンクラブ、略してKFCの掴んでいる情報によると、今彼女はフリーだ」

「あ、そう……」

それよりKFCって。マスコットは白ひげの眼鏡おじいさんなんて言い出さないよな。

「万が一告白に成功して、お前と神楽坂さんが付き合う事になりでもすれば、俺たちKFC いや、黎桜学園全生徒の希望の光は潰えてしまうだろう。それだけは絶対にあってはならないんだ」

「告白しないってのに」

「今この状況、この現在が我々黎桜学園全生徒にとっての幸せなんだ。神楽坂さんは男に連れ回される心配はないし、俺たちは神楽坂さんがフリーでいるというだけで、お腹一杯だ。わかったな？俺たち、ひいては黎桜学園の幸せを壊す真似はしないでくれよ」

「しないよ」

妹に告白するわけないだろ。心の中で吉野は付け加えた。

吉野は観月を愛している。だがそれは、あくまで兄としての家族としての感情だ。

男女という面で、観月を見た事などはない。断言できる。

「……あ。いつけない……。そろそろ帰らなくちゃ」

「えー、もう帰っちゃうの？」

「うん、ごめんね。夕飯作らなきゃいけないの」

話題が無くなった二人の耳に、観月と女友達との会話が入ってくる。

夕飯を作らなければいけない、そう言う観月の言葉に嘘はない。なぜなら吉野と観月は二人で暮らしているからだ。

「え、夕飯？ 神楽坂さん、一人暮らしなの？」

「ううん、違うよ。お兄さんと、二人暮らし」

「ぶっ！」

吉野は思わず噴き出した。その音に反応して、観月と女友達が振り返った。

女友達は不思議な物を見る目で、観月は「しまった」という顔をする。

吉野と観月の関係は内緒も内緒、トップシークレット機密事項なのだ。バレてはならない。

わたし、頑張るからね！

観月は胸の内で兄に誓った。

ちよつと悔しいけど、二人の関係は秘密だもんねっ！

「いきなり何噴き出してんだ？ 汚ねえなあ」

「わ、悪い……」

恵祐が心底嫌そうな顔をして漏らした。

吉野は形だけの謝罪を述べると、未だ暴れる事をやめない心臓をなだめにかかる。

危ない。本当に危ない。もしあそこで、「わたしの兄さんは、あの人の！」などと指さされでもしていたら、その時点で自分の人生にはピリオドが打たれていただろう。本気と書いてマジだ。

「それじゃあ、わたし帰るね！」

「うん、また明日ねー」

友人との挨拶を済ませ、観月が走り寄ってくる。

恵祐は少し嬉しそうな顔を見せ、吉野はなるべく何もないように装うべく精神統一を図った。

けれども観月の小走りでふわりと翻るスカートの裾は男子二人の心を掴んで離さない。嗚呼、その下には絶対領域が。

「あ、その、ダメ、だよ。えっちな視線禁止っ」

「ご、ごめん……」

「す、すいません……」

二人の視線に気がついた観月は立ち止まり、少しだけ頬を膨らませた。

そんな姿もまた愛らしく、彼女の人気を高める要因の一つなのだ

ろう。

生徒会長の責務として男子の邪な考えに釘を刺して満足したのか、机の横に提げられている鞆を手についた後観月が口を開いた。

「二人とも、早く帰らないとダメだよ？」

親指を立てて、笑顔で言う。

「ぶはっ」

……恵祐が撃沈した。

血飛沫があたりに飛び散る。それを見、吉野は思う。

下手すれば、人が殺せるんじゃないか。

## 第一話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！

てな感じで『義妹は生徒会長！』をよろしくお願いします。

## 第二話

もうすぐ七月に入ろうとしているため、四時過ぎになってもまだ外は明るい。

背中越しに運動部の元気な掛け声を聞きつつ、吉野は一人校門への道を歩いていった。

教室で鼻血の噴水を見せた恵祐は保健室に送り届けておいた。命に別状はないらしい。

……鼻血による大量出血で死亡なんてギャグとしか思えないが。

「……さて、と。早く帰らないとな」

校門を出た後、側に立っている卒業生寄贈の時計を見上げた。時刻は午後四時半。

今頃観月は夕飯の買い出しに行ってるだろうから、他の家事は先に済ませといてやるか。

吉野は脱衣所に溜まっている洗濯物の山を思い浮かべた。

自分の下着やシャツ、靴下とか……。後は、その、観月の下着……。

白くて、フリルのついた……、

「って俺は何を考えてるんだっ!？」

顔を真っ赤にして吉野は叫んだ。近くを歩いていた人たちが少し吉野から距離を取る。

「ママー、あの人」「見ちゃダメよ」……なんて声も聞こえてきた。吉野はさらに顔を赤くし、少し俯きがちに、駆け足で自宅への道



を急いだ。

「観月は妹、観月は妹、観月は妹だからなっ!？」

自分に言い聞かせるよう呟きながら。

周囲の視線を気にしながらも吉野はなんとか自宅へとたどり着いた。

吉野と観月の愛の巣 訂正、二人の自宅は黎桜学園から距離一キロメートルもない所に位置する住宅街にある。

住宅街そのものが小高い丘の上にあるので黎桜学園だけでなく、さくらみね桜嶺市全体を見渡す事も出来、なおかつ閑静なので高級住宅街としてなかなかの人気を誇る。

訳あって吉野と観月は二人で暮らしているわけだが、吉野は案外この生活を気に入っていた。

「ただいまー」

ドアを開け、帰宅の挨拶。

誰もいないとわかつてはいるが、それでも言ってしまうのはすでにこれが習慣づけられているからだ。

「つて、ん？」

吉野は怪訝な顔をした後、耳をすませた。何かが聞こえる。

ドタドタドタ、と床を走る音。観月は帰ってきているのだろうか。観月か、と言おうとしたところで吉野は固まった。

「いつ!？」

「兄さあああん!」

玄関で立ち尽くす吉野の視界に映るのは義妹の観月だった。どうやら買物物は早めに済んだらしく、もう既に帰ってきていたらしい。いや、吉野が固まっている理由はそれではなくて。

「お、お、お、お前っ!　なんでエプロンの下に何も着てないんだ!」

唾を飛ばさんばかりの勢いで吉野が叫んだ。

「兄さんを喜ばせるためですっ!」

両手を広げて走り寄ってくる観月。彼女は純白のフリルがついた可愛らしいエプロンを着ていた。

ただし下には何も着ていない状態で。俗に言う、裸エプロンという奴だ。

下に何も着ていないが故に体の線はよりくつきりと見える。これが着エロという奴ですか、と吉野は勝手に自己完結した。ちなみに着エロではない。

上半身は何かエプロンのおかげで隠れてはいる。が、下半身はどうなのか。吉野にそれを確かめる勇氣はなかった。

と、いうかだ。

「ま、待て待て落ち着け!　その状態で抱きつこうとなんてするなよ!？」

義妹を止めるべく、吉野は両手を突き出してなだめにかかる。

この状態で抱きつかれるなんて事になったら理性を保てるかどうか

か定かではない。

と言うが無理だ。絶対無理。なにせ超がつくほどの美少女が裸エプロンで自分に飛びついてこようとしているのだ。

吉野は覚悟した。

神様、養父さん、母さん、俺は悪い息子です。まさか義妹に手を出すことになるとは　！

「兄さあん！　お帰りなさああい！」

観月が足に力を込めて力一杯跳躍する。

それは美しい姿だった。純白のエプロンを纏う女神。

ああ、そうだ、まさしく女神だ。これから俺を樂園へと導いてくれる……。

ぶひゅっ。

間拔けな音が耳に入った後、吉野の視界は暗転した。

「兄さんっ！？　しっかり、気確かに！」

「……み、観月、エロい……ぜ……」

鼻からナイアガラの滝を彷彿とさせるほど見事な勢いでその鮮血を垂れ流す吉野は、ぐったりと観月の胸の中に倒れ込んだ。

榊家の玄関は、紅に染まった。

「……ん？」

「あ、よかった。目が覚めたんですね」

近くにぼんやりとした観月の顔。吉野の頭は何があったのかと記憶を整理し、結局観月が裸エプロンで鼻血ナイアガラという訳のわからない結論に至った。

ゆつくりと体を起こす。観月はそれを手助けするように背中に手を添えてくれていた。

少しはつきりしない目を擦り、また目を開く。今度ははっきり見える。もう裸エプロンではないらしい。

「観月、おはよう」

「おはようございます、兄さん。でも朝じゃありませんよ。午後の六時です」

上品に笑いながら、観月は部屋の柱時計を指さした。という事はここはリビングなのだろう。

吉野が寝かされていたのはソファらしい。上品な黒革製だ。

「お前が寝かせてくれたのか？」

「……はい」

自分のせいで吉野が倒れた事に責任を感じているのか、少ししょんぼりとした顔で観月が答える。

「あ、あのっ、兄さん……ごめんなさい……」

「ああ、いや、気にするなよ。俺を喜ばせてくれようとしたんだろ？」

吉野は笑顔で答える。その言葉に観月の表情は明るくなった。

「あ、ありがとうございます！ やっぱり、やっぱり兄さんは素敵な人です……」

うつとりと、恋する乙女のように瞳を輝かせて吉野を見る。

どうにもこうにも答えられなくなって、吉野は頬を掻いた。これぞ青春、だろうか。

「……ところで、夕食は？」

「出来てますよ。冷めちゃうから、早く食べましょ？」

ちょこん、と首を傾げる。

この仕草も何もかもほとんどが天然だから恐ろしい、とは吉野の談である。

「ううん、相変わらず美味しいな」

「おかわりなら、たくさんありますよ？」

吉野と観月は顔を向かい合わせるようにしてリビングのテーブルに着いていた。

目の前には沢山の料理。全て神楽坂観月お手製の、KFC会員なら垂涎モノの逸品である。

そしてその料理が美味しい事美味しい事。吉野の好みを熟知している観月にしかできない微妙な味加減。普通の高校生には少し難しいで

あろう揚げ物すら完璧にこなすこの手腕。

神楽坂観月は榊家の台所の番人として完璧であった。

「ああそつだ観月」

観月お手製の天ぷらを頬張りつつ、吉野が口を開いた。

「全部飲み込んでからじゃないとダメですよ」

そんな吉野に言い聞かせるよう、観月は唇の前に人差し指を持ってくる。

そんな仕草だけでも非常に色っぽい。吉野は生返事を返し、天ぷらを飲み込んだ。

「お前、ちよつと人気がありすぎじゃないか？」

改めて吉野が口を開く。

「そうですね。わたしもそう思います」

「KFCとか、わけわからん団体もあるみたいだし……。お前、誰かに危害加えられたりとかしてないよな？」

心配そうな顔で吉野が聞いた。

自分ではわかっていないかもしれないが、吉野はシスコンである。

「大丈夫ですよ。少なくともKFCの皆さんはわたしに危害が加えられないように守ってくださいる事が多いですから」

「……それはそれで心配なんだが」

吉野はKFCの会員が「お逃げください姫様!」「ここは我々が

！」「姫様を守れるなら本望！」「我が生涯に一片の悔い無し！」「姫、私たちは名も無き雑兵です。ですが、よろしければ、我々のこの姿を、どうかその目にお焼き付けください！」などと口々に叫んで散っていく姿を想像した。

KFCが恵祐みたいな奴らの集まりであるならありそうな想像だった。

「それより、わたしは兄さんの事が心配です」

「え？ 何で？」

「だって兄さん……影では結構な人気なんですよ？」

少しだけ唇を尖らせて、面白くなさそうに観月が言った。  
だがそんな話、吉野にとっては初耳だった。少し嬉しかったりする。

「ま、マジかよ。詳しく聞かせてくれ」

「……兄さん、可愛い顔だから……男の人に人気なんですっ！」  
「……」

顔を赤くして、叫ぶように観月が口を開いた。

しかし吉野には二重の意味で衝撃である。

まさか自分が童顔だと妹に言われるとは。そして俺は男に人気だったのか。

吉野の心に暗雲が立ちこめた。ひどい、ひどすぎる。自分は女性に人気でないのか。

「後……じよ、女性にも人気みたいですけど……」

「そ、それは本当かつ！？」

「……兄さんと三井さんなら、どっちが受けかなあって、文芸部のお友達が」

吉野は涙した。結局それが、それなのか。

ああ母さん。どうして俺はあなたに顔が似てしまったのでしょうか。

親子だからよ。

海外にいる母親の声が聞こえた気がした。

「ふう……」

溜息すら反響して聞こえる広い風呂場。湯気が部屋を満たし、視界を白く染めている。

湯船に肩まで浸かりながら吉野は今日の事を考えていた。

「……俺は、男に人気が……」

うわごとのようにぶつぶつと呟く。

夕食時の観月からのカミングアウトはよほど深刻なダメージを吉野に与えたらしい。

「男、人気、人気、俺は受け、恵祐が相手、組んずほぐれつ、アッー」などと訳のわからない事を呟いている。末期だ。

「入りますねー」

「ああ、観月か」

がらがらと風呂場の扉を開けて観月が入ってくる。そしてそのまま湯船に浸かった。ぽちゃん、と水の音。



「ってなにしてんだお前えっ！」

今更異常事態に気付いた吉野が声を上げる。  
その顔は真っ赤だ。のぼせたのか、それとも観月が隣にいるからか。

「何って、お風呂ですよ？」

笑顔で観月が答えた。

そこではない、そこじゃないんだと吉野は心の中で突っ込んだ。

「何でここにいるのかを聞いてるんだけど」

「……寂しかったから、つい」

「つい、じゃない！ 年頃の男女が二人で風呂はまずいだろ！ 俺は出てくからお風呂楽しんで良いよ、それじゃあ！」

噴火するんじゃないかというくらい顔を真っ赤に染めた吉野は、湯船から立ち上がり風呂から出ようとする。

その足に観月の細くて長い手が絡みついた。

「ちょ、おまつ……」

「わたしとは、入りたくないですか……？」

観月の黒い瞳が、寂しげに揺れる。

吉野はうつ、と息を呑んだ。

「い、いや、それとこれとは話が別かと」

「……わたし、兄さんと一緒にお風呂に入りたいです……」

「あ、いや、その、あの……」

結局、吉野と観月の二人は背中合わせで風呂を満喫したという。

## 第二話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！ てな訳で二話目です。

観月が敬語なのは、これがデフォだからです。

学校での観月は無理してまでタメ語なのですよ。健気な女の子は可愛らしいですね。

更新は、なるだけ週一ペースでやっていこうと思っています。休日はテンションが上がるので土日二日連続投稿も出来るかもしれませんが。

ただ、今週からテスト期間なので週一は少し厳しいかもです。期待しないで待っていてくださると光荣です。

### 次回予告

とりあえず顔見せ編は終わりました。学校での観月、家での観月像を何となくでも理解してくださると嬉しいのですが。次回からコメディパートです。ていうかずっと？

次回、『観月にデートの申し込み』編をお楽しみに。

この次回予告の内容と食い違う場合もございます。

### 第三話

放課後の教室。

教室の中は開け放たれている窓から見える夕日によって、あかね色に染め上げられていた。

ゆつくりと教室があかね色に染まっていく様は、かなり幻想的だ。外からは野球部がグラウンドを駆ける声や、吹奏楽部の少し音程が外れた演奏なども聞こえてくる。

そんな中に、二人の男女がいた。

窓の近くに向かい合って立つ二人は、顔を伏せたままで口を開こうとはしない。沈黙が教室を支配する。

男子生徒     短めの髪と日焼けした肌が印象的だ     は爪が掌に食い込むまで強く拳を握っていた。

これは、彼にとって一世一代の大勝負であった。

今日、目の前の彼女は突然の転校を告白した。転校先は県外、それも遠く離れた地方だ。

両親の仕事の都合で転校するので、もうここに戻ってくる事はないだろう。

それは、二人はもう会う事などない、という事を暗に語っていた。

そんなの、そんなの嫌だ！

少年は心の中、叫ぶ。

少年と少女は俗に言う腐れ縁だった。もしくは幼馴染み。

小学校の頃から、今、高校生になるまでずっと同じクラスだ。

喧嘩なんて何度もした。憎まれ口を叩き合う事ばかりだった気がする。

だからこそ、これからずっと、こんな関係が続くと考えていたのだ。

でもそんな予想は脆くも崩れ去った。彼女は転校してしまう。そして明日、この町を去る。

その告白を聞いた時、少年は衝撃を受けた。同時に、何か熱い物が頬を流れ落ちるのを感じた。高校生にもなつて情けないとは思ふ。それでも止められなかったのだ。

頭の中、流れてゆくのは彼女との思い出の数々。何でもない事だった。昔の自分には。

でも、今の自分には、それがとても大事で、とても大切な事のように思えた。

そして彼は、今更になつて、自分の気持ちに気がついたのだ。本当は昔から気がついていて、それを隠していたのかもしれない。

だからこそ、言わなければならぬ。折角気付いたこの答え、伝えないわけにはいかないんだ。

「……ユキ」

「……シュウ」

二人同時に、口を開いた。

口から出たそれは二人だけのあだ名。高校生になつてからは、恥ずかしくて使おうとはしなかったけれど。

「……お、お先にどうぞ」

シュウ、と呼ばれた男子生徒が恥ずかしいのを隠すように顔を背け、女子生徒に言った。

「あんたこそ、先に言いなさいよ」

「いや、ここはレディーファーストで」

「レディーファーストは、ここで使う言葉じゃないでしょ」

呆れたようにユキ、と呼ばれた女子生徒が肩を竦めて見せた。  
シュウは思う。昔の自分は、こんな事言われたらすぐに怒っていたのだろう。

でも今は違う。そんな仕草、いつも見てきたその仕草の一つ一つが愛らしい。

「……ユキ」

「な、何よ……」

いつになく真剣なシュウの声に、ユキが少したじろいだ声を出す。

「……ダメだ、俺……口べたなんだ」

「はあ？ 何を……ッ!？」

怪訝そうな顔を見せたユキの小さな体は、シュウによって抱きしめられていた。

ユキは顔をすぐに赤くして、彼から離れようともがく。

「は、離しなさいよこの変態ッ!」

「嫌だ! これが俺の気持ちなんだ!」

「き、気持ちって……」

今まで力一杯シュウを拒絶していたユキの体から、力が抜けた。

「き、気持ちって、何よ……」

「……昨日、お前が転校するって聞いて、なんか色々考えた。それがこの結果。……俺はお前が好きだ。離れたくないし離れたくない」  
「な……、あんた……」

「ユキ、お前は……どうだ……？」

今までしっかりと抱きしめていたユキの小柄な体を放し、シユウが訪ねた。

その瞳の色は真剣で、しかしどこか不安げであった。

その姿を見て、ユキも何か決意したのかゆつくりと口を開く。

「……私は、ね」

「……」

「……もつと前から気付いてたわよ、ばか」

ここで画面がフェードアウト。

夕日を背に口付けを交わす場面で、今現在話題沸騰中の青春映画は幕を閉じた。

変わってここは放課後の生徒会室。

生徒会室備え付けの五十型液晶テレビの前に座り、この映画を見ていた黎桜学園生徒会長、神楽坂観月は大きく溜息を吐いた。

「良い映画だったね……」

その睫毛は涙で濡れていた。どうやら感動したらしい。

「ありがとう、氷室先輩」  
ふくかいちよう

観月は涙を流したまま、液晶テレビとカラフルなコードで繋がっているDVDプレーヤーから今まで見ていた映画のDVDを取り出し、同じく映画を見ていた生徒会副会長である氷室正義ひむろまやよしに手渡した。

眼鏡がよく似合う、理知的な生徒である。

「いえ、礼には及びません」

「凄く感動したの。見せてくれて本当にありがとう」

「お気に召したようで、嬉しいですよ」

氷室は嫌みを含まない、純粋な笑みを観月に返した。

「まだ他にもいくつかありますが、見てみますか？」

「ううん、もうお腹一杯……。ところで、この映画ってまだDVD発売されてないよね」

氷室の申し出を断り、観月は彼の手にあるDVDを指さした。

まだ劇場で公開されている作品のため、DVD発売はもう少し先のはずなのだが。

「ああ、これは親戚が映像業界の者ですから……。たまに頂くんですよ」

「そうなんだあ」

につこりと笑って返答する氷室の言葉に、観月は感嘆の溜息を漏らす。

「……ああ、そういえば」

ぼん、と、何かを思い出したように氷室が手を叩いた。  
不思議そうな顔をする観月に、氷室は笑顔で口を開く。

「その親戚に今週末にあるプレミア試写会のチケットを頂いたのですが……一緒にいかがですか？」



「ほえ!？」

何とも大胆な。

生徒会副会長氷室正義は、黎桜の姫君とまで謳われた稀代の美少女神楽坂観月を、あろう事がデートに誘おうとしていた。

一方その頃。

吉野は体育館裏にいた。

自分の机に入っていた手紙に、「放課後体育館裏にて待つ」と書かれていたのだ。

体育館裏と言えば告白のメッカ。女生徒からの告白を期待しないわけがない。

ついに自分にも春が来たのか……！ 吉野はそう思っていたのだが。

「……お願い、榊！」

「ま、待って、落ち着こう……な？ えーと……」

「氷室霧子よ」

「氷室さん、落ち着くんだ」

体育館裏で待っていたのは確かに女子生徒だった。

だが、女子生徒の要求は吉野との交際などではなく……、

「同人誌のモデルになって！」

「だから嫌だつて！」

「三井との絡みだったら、それはもう、イけるから！」

「行かなくて良いから！」

霧子の妄想にツツコミを入れつつ、吉野は溜息を吐いた。

氷室霧子。吉野と同じ高校二年生。義妹いもことでもあるあの神楽坂観月には及ばないが、十分な美少女だった。

肩より少し長めの黒く艶のある美しい髪の毛。鼻の筋がよく通った綺麗な顔立ちで、睫毛も長い。

手足も長くすらつとしており、胸に至っては観月よりも大きいくらいだ。

……ただ、彼女は見事に腐女子だった。

「強情ね」

「当然だろ！ 同人のネタにされて喜ぶ奴はいない……と思う……」

自信がないのか、吉野の声は尻すぼみになる。

「……はあ。じゃあこういうのはどう？」

「え？」

にやり、と悪役のように笑った霧子は、どこからか何かのチケットらしき物を取り出した。

先ほど氷室正義が観月を誘ったプレミア試写会の招待券だが、そんなもの吉野にわかるはずがない。

「これ、映画のチケットなの。……週末、私は丸一日、榊とデートする。その代償に、榊は一日限りで同人誌のモデルになる。そういう取引、どう？」

吉野は迷った。これはなかなか考えさせられる取引だ。

頭の中で、映画と、霧子と、同人のモデルになっている自分が思い浮かぶ。

霧子が持っている映画のチケット、よく見れば自分が見たいと思

つていたアクション映画だった。

目の前の氷室霧子。何と言おうと美人だ。隣を歩けるだけ幸せかもしれない。……それを言っていると観月はさらにそうなのだが。

そして自分。モデル……と言っても、いくら何でも裸とか、そんなになつたりするわけないだろう。

結論は出た。

映画＋霧子＞自分、の不等式が。

「よし、行こう」

「ほんと？ やった！」

霧子が心の底から喜んだように飛び跳ねる。

そんな姿を見て、吉野は、喜んでくれるなら同人誌のモデルも別に悪くないかもしれないなあ、などと考えはじめていた。単純である。

「前からね、柗には興味あったのよ」

頬を上気させ、興奮したように霧子が言った。

「同人のモデル的な意味でだろ？」

「それもあるわ。でももう一つ……一人の男としてもよ。じゃね！」

「え、ちょ……詳しく聞かせて！」

恥ずかしいのか、体育館裏から逃げ出した霧子に向かって声をかける。

だが、帰ってきたのは「三井との絡み頼むよー！」という叫び声だった。

「畜生……」

口ではそう言いつつも、吉野の顔は結構満足げである。  
なにせ、生まれて初めてのデートなのだから。

観月は祝福してくれるかな、とか、どんな服を着ていこうか、などど、脳天気<sup>ど</sup>に週末のデートの事を考えつつ、鼻歌交じりに上機嫌<sup>いもち</sup>で吉野は家路についた。

義妹もデートに誘われている事など露知らず。

### 第三話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！ と見せかけておいて主人公はメインヒロインそっちのけでデートに走ります、義妹は生徒会長！ 第三話でした。如何でしたでしょうか。

いやはや、顔見せが終わった途端にいきなり話が動く予感ですよ。というか一日に二回更新とは自分でも驚きです。テンションが上がるとうなるのでしょうか。

さてさて、副会長氷室正義と氷室霧子の関係ですが、お察しの通り兄妹です。苗字同じだし、同じチケットだし、まあどう考えてもそうですけど。

霧子はどこか意味深な台詞を残して消えましたね。彼女の今後の行動によって、このお話がハーレム物になるかどうか決まると言っても過言ではありません。

ではここで次回予告。

観月にデートの話を伝える吉野。

観月は霧子に嫉妬し、吉野への当てつけのために氷室副会長とのデートを決意する。

一方観月と氷室のデートの情報をKFCが察知して……？

この次回予告は実際の第四話と異なる可能性もございます。

てなわけで、目指せ妹系ラブコメ、義妹は生徒会長！ をよろしく願います！

## 第四話

「」

夕食時の榊家。いつものように向かい合って座っている二人だが、吉野はさつきからずっと上機嫌であった。つい三時間前、人生初めてのデートにこぎ着けたのだから仕方ないといえば仕方ないのだが。

鼻歌交じりに観月お手製の餃子を頬張る吉野を見、義妹の観月は自分もほんわかと、幸せな気持ちになっていた。

なにせ自分が心から好いている人が幸せそうにしているのだ。幸せにならないはずがなかった。

「兄さん、幸せそうですね」

「あ、バレた？」

観月が笑顔で訊いた。対する吉野は、口元を緩ませたままである。よほど幸せなのだろう。デートを持ちかけた霧子も彼がここまで期待するとは考えても見なかったのではないだろうか。

「そんなに嬉しい事があつたんですか？」

「ああ、そりゃあもう。観月も聞いたら喜んでくれるはずだよ」

吉野は自信ありげにそう答えた。

自分の事を常に気遣ってくれている観月なら、初デートの話を聞いても笑顔で祝福してくれると思っていたのだ。

現実はその甘くないのだが。

「私も喜ぶ事ですか？ 是非聞きたいです」

「ああ、聞いても驚くなよ？」  
「はい」

しっかりと確認した後、吉野はゆっくりと口を開いた。  
自分のその言葉が、観月を大きく傷つける物だとは知らずに。

「週末に、デートする事になったんだぜ！ 俺の初デートだ！」

嬉々として語る吉野。だが、その言葉を聞いた観月は固まったまま動かない。

不思議そうに観月の顔をのぞき込む吉野だったが、反応を見せる様子はなさそうである。

数秒経った後、観月が少し震えるような声で訊いた。

「……誰と、デートするんですか……」  
「んー？ 隣のクラスの氷室さん……だけ……ど……？」

観月の問いに答える吉野だったが、その声は段々と尻すぼみな物になってゆく。

何故か。観月の纏う雰囲気がいいつもとは全く違う物に変容していたからだ。

怒り、ではない。ただ悲しみだけがそこにあった。

「……悪いんですけど、食器のお片付け、よろしくお願いできますか」

「え、ああ、うん……」

顔を伏せたまま、観月が立ち上がる。

呆氣に取られる吉野をよそに、彼女は早足で二階の自室へと向かった。

一人リビングに残された吉野。その顔には、何が何だかわからないと書かれていた。

「……」

自室に戻った観月は、無言でベッドに倒れ込んだ。綺麗に畳まれている掛け布団が、優しく彼女の体を包み込む。

枕に顔を埋めた観月の胸の内を支配するのは、どうにも言いようがない悲しみと、なんてバカな事をしたのだろうという自責の念だった。

吉野が週末にデートするという話を聞いた時、観月は目の前が真っ暗になったように感じた。

自分の愛する兄、榊吉野。彼を奪われてしまったような気がしてならなかったのだ。

別に自分の物というわけではない。それはわかっている。けれど、彼と一番距離が近いのは自分だと思い込んでいた。いつも兄の側にいるのは自分だと、傲慢に考えていたのだ。

だから、凄く悲しかった。吉野から見ればいい迷惑なのかもしれない。それでも観月には、大事な宝物を失ってしまったように感じられていた。

兄の優しい笑み。それが、自分以外の女子にも向けられるのかと思うと、寂しくて、そして切ない。

出来る事なら、兄には自分だけにその優しい笑みを見せてほしかった。他の女子じゃなく、自分だけに。



「……我が儘ですね……わたし……」

わかつてはいる、わかつてはいるけど、この想いは消せるわけはないのだ。

だからこそ、今自分は自責の念にも駆られている。

それほどまでに兄を想うのなら、どうして彼の幸せを祝福してあげられないのか。

あれほど喜んでいる彼に、冷たく当たる必要なんてなかった。自分は、義妹<sup>いもつと</sup>として、彼の初デートを祝ってあげるべきだったのだ。だけど、それは出来ないと言を振る自分がある。

自分　神楽坂観月は、どうしようもなく、義兄<sup>あに</sup>である榊吉野が好きなのだ。

彼の幸せを考えなければいけないのもわかるが、自分も彼と共に幸せになりたいという思いの方が強い。

「……………嫌な、女ですね……………」

観月は自嘲げに笑みを漏らし、今日の放課後の事を思い返した。

\*

「そ、それって、デート……………だよな？」

氷室からの突然の誘い。週末、一緒に映画に行かないかという、もっとう考えてもデートとしか言えないその誘いは、観月を混乱さ

せるのに十分な破壊力を有していた。

あたふたと慌てふためき、観月は目まぐるしく表情を変化させる。そんな彼女の姿を、生徒会副会長、氷室正義は暖かい目で見つめていた。

「取りようによつては、デートですね」

恥ずかしげも無く、氷室は言う。

黎桜の姫君と呼ばれる観月をデートに誘うという、一般人なら尻込みするような事をやってのけても平然としていられるあたり、大物だろう。

「で、デート……うん……」

何度かデート、と言う単語を繰り返す彼女の脳内には、義兄<sup>あに</sup>の榊吉野の顔が浮かんでいた。

女性にモテない、などと言って嘆き悲しんでいた兄の気を晴らすため、今週末は彼を誘ってどこかへ遊びに行こうと思っていたのだ。

「何か予定が有りなら、無理にとは言いませんが」

考え込んでいる観月を気遣ってか、氷室が優しく声を掛けた。

予定として決まっているわけではないのですが、と観月は思う。

大体、まだ当の本人の意見を聞いていないのだ。余計なお世話だと思われるかもしれないし、もしかすると週末、吉野は暇じゃないかもしれない。

断られ、失意のままに週末を過ごすのなら、氷室と映画を見に行つた方がよほど観月にとっても幸せだろう。

「……ごめんね、氷室先輩。<sup>ふくかいちやう</sup>週末は、お兄さんと過ごす事に決まってるの」

……それでも、観月は兄を取った。

自分の幸せよりも、兄の幸せを取ったのだ。

「そうですか、それは残念……。ですが、兄妹の仲は良好でなくてはね」

断られても、氷室は笑顔を崩したりはしない。よほど人間が出来ていると見える。

「折角誘ってくれたのに、ごめんなさい……」

「おやおや、謝らないで下さい」

しゅん、と小さくなり、観月が謝罪する。

だが氷室はそれを静止し、その手に何かを握らせた。

「これは……？」

開いた観月の手、乗っているのはプレミア試写会の招待券だった。驚いた顔で観月が問う。

「ど、どうして……」

「もし宜しければ、お兄さんと共に楽しんできて下さい。私からの気持ちです」

心からの、悪意など一欠片も含まない、純粹な笑みで氷室が答える。

「で、でも、これは氷室先輩の……」

「気にしないで下さい。あなたの幸せに一役買えるなら、そんな紙切れ、惜しむ事はありませんから」

お兄さんどうぞ仲良く、と言葉を残し、氷室は荷物を纏めて生徒会室を出て行った。

夕暮れ時の生徒会室。

一人ぼつんと佇む観月は「ありがとうございます」と、もう見えなくなった背中に呟くのだった。

\*

「……結局、使う事はないのでしょうか……。折角氷室先輩がくださったのに……」

ぼんやりとその手に握られた試写会の招待券を弄くりつつ、観月は呟く。

吉野を誘おうと考えていたのだが、どうやら無駄になってしまいそうだ。

溜息を吐いた彼女は、ふと、壁に掛けられている時計を見た。

兄とお揃いの壁時計、短針は九を指そうとしている。色々と考えているうちに時間が経ってしまっていたらしい。そろそろお風呂に入ろう、と思い、観月はゆっくりと立ち上がった。

階下、リビングに近づくにつれ、吉野の声が大きくなってきた。誰かと電話で話しているらしい。観月は立ち止まり、近く影に体を潜めた。

やっぱり私、最低じゃないですか。

心の内の呟きを無視し、観月は聞き耳を立てた。どこか嬉しそうな兄の声。同時に観月の心は沈んだ。

『うん、おっけーおっけー。わかってる、約束は守るって。好きなだけ付き合うよ』

ずん、と観月の心に何か重しが乗ったような感覚が訪れた。約束、好きなだけ、付き合う。てんでばらばらなキーワードだけでも、最悪の結末<sup>ラスト</sup>を想像させるのには事足りた。

ふらふらとよろめきながら、吉野にバレないよう静かに階段を上がり、観月は元の自室へ戻る。

そして勉強机に置いた携帯電話を手に取り、アドレス帳の八行、『氷室正義』と書かれたところで操作を止めた。

「……ごめんなさい。……行きます」

観月は、通話ボタンを押した。自分のくだらないプライドに氷室を巻き込んで良いのか、最後まで

で決断を出せないままに。

最終的に、彼女は氷室とのデートを決めた。

＊

所変わって、黎桜学園。

ここはどこであろうか。窓には全て暗幕が垂らされているため、外からの光は全て遮断されている。

内部には忙しく動き回る生徒たちが五人ほど。

様々な機器を展開し、各々が各々の仕事に没頭している。

彼ら自身が怪しい事を除けば、特に変わった様子は見られないのだが……。

「会長、姫君の携帯電話から、何者かに電波が発信されております！」  
プリンセス

怪しい機器を弄くっていた一人が、慌てたように声を上げる。

その声に周りの生徒たちにも動揺が走った。

「静まれ」

会長と呼ばれた生徒はその手でざわめく同胞を静まらせ、先ほどの報告を行った生徒に尋ねた。

「相手は特定できるか」

「そこまでは出来ませんが……内容の傍受なら可能です」  
「よくやった。ヘッドセットを貸せ」

会長は受け取ったヘッドホンを装着し、姫君と、もう一人の誰かとの会話に耳をすませた。

「……ので、一緒に……」  
「……すか？ ……さんは……」

所々ノイズが入り、よく聞き取る事が出来ない。  
忌々しげに舌打ちした会長は、邪念を振り払うように目を閉じ、精神を集中した。会話を傍受している時点で既に邪な気持ちが入り込んでいるのだが。

「……から、……デート……を……」  
「…………した。……週末、……」

会話を聞いた会長は、ここにいる全員に聞こえるような大声で叫んだ。

「諸君、我らがお守りすべき黎桜の姫君は、週末、どの馬の骨とも知らぬ男とデートを行う！」

会長の言葉に、教室の至る所から悲鳴にも似た叫び声上がる。

「我々がすべき事は一つ。デートの邪魔？ そんな物ではない！  
我ら神楽坂観月ファンクラブの使命は、姫君がデートを楽しめるように、影で精一杯サポートする事だ！ わかったか！」

「イエス・サー！」

軍隊並に調和のとれた掛け声を返し、KFC会員たちは、来るべき週末のデートを成功させるため、走り回るのであった。

榊吉野と神楽坂観月、そしてKFC。

それぞれの思いを胸に、週末、波瀾万丈のデートが幕を開ける。



## 第四話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！ 第四話です。如何でしたか？

さてさて、二日連続更新な訳ですが、正直頑張りすぎました。

次回からは週一更新になります。

と言うわけで今回第四話は少し長め……じゃないですかそうですか。それにしても氷室先輩が良い奴過ぎて困ってます。企画段階では無理矢理観月にデートを迫るクソ野郎だったんですが、どこをどう間違ったんでしょう。ただの完璧善人です。

てかそれよりですね、掲載四日目にしてPV一万アクセスを突破いたしました。

これも皆様のおかげです。本当にありがとうございます！

なんだか第四話目からいきなりクライマックス的なノリですが、呆れないで、どうかこれからも『義妹は生徒会長！』をよろしくお願いします。

それにしても生徒会長である点を活かしかれてないのが痛いところです。

### 次回予告

週末、映画館へのデート。

吉野と観月とKFC。

それぞれは週末、何を見て、何を思うのか。

次回、衝撃のデート編最終話をお楽しみに。

誇張表現が入ってます。衝撃なんてないです。

## 第五話（前書き）

PV二万アクセス突破しました。ありがとうございます。

## 第五話

「行ってきます」

「観月？」

週末、土曜日。吉野と観月の二人は玄関にいた。

観月は外行きの服を着ている。道を歩いている世の男どもなら、十人中十人が目を引かれると思われるほどにその姿は可憐で、観月に似合っていた。

今さっき起き出したばかりの吉野も、一瞬で覚醒するような可愛さだ。

「……デートです」

吉野の問いに、観月は少し顔を逸らして答える。だが、吉野の反応が気になるのだろう。その目はちらちらと彼を見ていた。

「デートお？……そっか。まあ、高校二年生だし当然だよな。楽しんで来いよ。俺も楽しんでくるから」

吉野の反応は観月の思い描いていた物とはかけ離れていた。彼は屈託のない笑みを観月に見せ、彼女のデートを祝福している。

観月の心は、二重に痛んだ。

自分は吉野への当てつけのため、デートに出ようとしているのに、彼は心の底からデートを祝福してくれている。それが痛い。自分には、出来ないこと。

けれど同時に、吉野は自分に対してそこまで深い感情を持っていないとも取れる。観月にはそれが凄く寂しかった。

「……朝ご飯は、ラップに掛けて台所に置いてありますから……。  
それじゃあ……」

「うん、楽しんで来いよ。お前の初デートだろ？ ああ……今日は  
記念日だな。俺とお前の初デート記念日」

吉野の底抜けに明るい声に、そうですねと短く返し、観月は玄関  
の扉を開けた。

一步一步、踏み出す足が重い。しかしこれは自分の選んだ道。今  
更進路を変えることなど許されようはずもない。

自らの心に一喝し、観月は歩き出した。氷室との待ち合わせ場所  
は、桜嶺市の中心に位置する桜嶺駅だ。

「……ふう……」

観月を送り出した後も、吉野は玄関に一人佇んでいた。

脳裏に浮かぶのはデートの相手、霧子……ではなく、今さっきま  
で会話していた義妹。いもうと

吉野はこの前、霧子とデートする旨を伝えた時から観月と距離を  
置かれている気がしてならなかった。

それがちよっぴり、ほんの少しだけ寂しい。吉野もまた、観月と  
同じような感情を抱いていたのだ。

近くにいるはずなのに、少しだけ離れてしまったような、そんな  
感覚。

「……とは言っても、観月も女の子だし、仕方ないよな」

吉野は自分で勝手に納得し、これ以上観月のことを考えるのはや  
めた。

本当に考えるのなら、今日のデートが終わってからでも良い。

「さて、今は何時だ？」

一人呟き、右手に握る携帯電話で確認する。午前八時ジャスト。待ち合わせの時間まではあと二時間ほど。

初めてのデートだからな、少し念入りに支度しよう。

これからの事に思いを馳せつつ、吉野は玄関を後にした。折角のデートなのだから、楽しまなければ。

だが、それが仇となった。

あまりにも格好を気にしすぎたのだ。

「うああああ！ ギャグじゃねえ、ギャグじゃねえよこれ！ 初めてのデートに遅刻って何それマジでアホだろ俺、うわあああああ！」

走る、走る、走る。現在時刻は九時五十分。このまま行けばどう考えても遅刻である。

待ち合わせの場所は奇しくも観月たちと同じ桜嶺駅。自転車を使えば間に合う距離ではあるが、今の吉野に自転車を使うという選択は思い浮かばなかったらしい。

ひたすら自分の事を失跡しながら走る吉野。「ママー、あの人」「見ちゃダメよ」……いつか聞いた親子連れの声が聞こえてこない事もない。

だがそんなの些細な事。今一番の懸念事項は待ち合わせに遅れる

か遅れないかだ。

「燃える俺ええっ！　バーニイイイグウウウ！」

「ママー」

「見ちゃダメ！」

地方都市の割にそれなりに栄えている桜嶺市の駅前には、まさしく桜嶺の中心と言っても良い。

百貨店や地方銀行本店、大型ショッピングモールに今回のデートのメインとなる映画館、果ては霧子のような人種御用達のアニメグッズショップなど、様々な娯楽施設が存在している。

当然人は多い。道行く人とぶつかりそうになりながらも、吉野はデートのお相手、氷室霧子を懸命に探していた。

現在時刻十時十分。遅刻だ。が、二十分で榊家からここまで来たのは半ば奇跡に近い。……まあ、デートに遅刻した事には変わりはないのであるが。

「どこだ氷室さん……」

きよろきよろと辺りを見回しながら吉野は歩く。集合と言われていた、駅前にある大きな桜の木の側に霧子らしき人影は見えなかったのだ。

遅刻したから怒って帰ってしまったのか……。そんな疑念に囚われる。

折角のデートだったのになあ。ああ、馬鹿だな、俺。

いくら後悔したところで、失った時間が戻るはずもない。

だが、吉野は後悔せざるを得なかった。  
初めてのデートなのに。生後初体験なのに。女の子と二人きりで  
出かけるなんて、未知の領域だったのに。

「……ああ……こうして俺は、女性と縁遠くなって、某二丁目に入  
り浸るようになるのか……」

「そういう展開も、なかなか良いかもね」

「……え？」

振り向く吉野の視界に飛び込んできたのはひらひらと手を振って  
微笑む霧子の姿だった。

観月に勝るとも劣らないほどの可愛さだ。吉野の第一印象はそれ  
だった。

長い髪の毛は頭の上で結わえられており　つまりポニーテールだ　、着ているワイシャツとミニスカートと共に霧子の健康的  
な色気を醸し出していた。

しかも良い匂いがする。これが女の子の匂いかぁ、と夢見心地に  
吉野は考えた。

「遅刻だよ榊」

「う……ごめん……」

が、その夢見心地も霧子の声で中断される。自分が悪いので、吉  
野はただ謝るしかなかった。

「まあ、良いけどね」

「ありがとう……」

「モデル期間、二日に延長」

「予想はしてました」

言って、二人で笑う。

まだ出会って間もないというのに、彼ら二人の仲はかなり良好と言えよう。

吉野は幸せだった。女の子と二人で笑い合う事が出来るとは。

……まあ、条件付きではあるが。それは言いつこなしと言つこと  
で。

「試写会まではもう少し時間があるから、買い物に付き合ってもら  
うわよ」

「了解。何買うの？」

「服よ。櫛女装用のね」

「……は？」

吉野は間抜けな声を出すしかなかった。女装用、女装用ってマジ  
ですか。

着るんですかそれ。俺が。俺は男なのに？

なんて心境を吉野は霧子に伝えたのだが……。

「……だって、櫛って近くで見れば見るほど可愛いんだもん……」  
「……」

頬を染めて言われたらもうどうしようもなかった。

吉野はやはり自分は女顔なのかと改めて残酷な真実を認識し、意  
気揚々とショッピングモールへと向かう霧子の後をとぼとぼと着い  
ていった。

彼は自問した。なぜ俺は女顔なのでしょうかと。

私の血を強く引いたからね。

前日も聞いた、海外にいる童顔な母親の声が聞こえた気がした。



「沢山買ったわね」

「沢山着せられたよ畜生……」

ショッピングモールにある喫茶店のテラス席に、満面の笑みをたたえた霧子と衰弱しきった顔の吉野が座っていた。

霧子の足下には購入した沢山の衣服（吉野女装用）があった。どうやら彼女は本気で吉野に着せたらしい。

「良いじゃない、新鮮な体験でしょ？」

「新鮮すぎてびっくりだよ。てか俺は男なのに……」

「可愛いのがいけないのよ」

男としてそれはどうなんだと突っ込みたいところではあったが、自分にはどうしようもないことを言われ、吉野はぐったりとテーブルに頭を乗せた。

デートだぜやっほう！ とか思ってやって来たのは良いものの、デートというものはどうやら自分の思い描いていたものとは大きくかけ離れているようだ。

「デートが女装するためのものなんて知らなかったよ……」

「それ皮肉？」

「一応」

「この後ちゃんと映画見るんだから、れっきとしたデートよ」

「なら、良いんだけど……」

正直吉野は疲れていた。二時間ほど試着室で弄られ回されたのだ。ワンピースを着たり、スカート穿いたり。体の線が細いために女

性ものでも十分着れると言うことが判明した。

恍惚とした表情で吉野の可愛さとそれによる三井との絡みの素晴らしいさを説く霧子から少し目を外し、あたりを歩き交う人々を意味もなく見つめていた吉野の瞳に、見慣れた人影が映った。

喫茶店向かいの雑貨店の前にいる朝見たばかりのあの影は……、

観月？ …… ああ、あいつもここでデートか……。

よく見れば近くには観月のデート相手と思わしき男の姿があった。眼鏡を掛けた理知的な男だ。優しそうな笑みを観月に向けており、対する観月も楽しそうに笑っていた。

「幸せそうだな……」

「ん？ どうかしたの…… って、あれ、神楽坂さん？」

吉野の呟きと視線の向きに気がついたのか、霧子が言った。

霧子も黎桜の生徒故、観月だとすぐにわかったらしい。そして隣にいる男の正体も。

「って、あれデート、デートなの？」

「たぶん、そうだと思うけど」

「何でデートの相手が兄貴なのよ」

「はあ？」

霧子の言葉に吉野は目を丸くした。

よく目を凝らす。柔和な笑みを浮かべる男は、どこことなく霧子に似ている気がした。

それにあの男、どこかで見たことがあるなと考えて、すぐに思い当たる。

「副会長、氷室正義……」

「あたりよ。私の兄貴なんだけど……なんで姫君とデートしてんのかしら」

「生徒会の繋がりでじゃないかな？」

「辻褄は合うわね……。でもあの二人じゃ不釣り合いよ」

そつだろつか、と吉野は思う。

仲よさげに談笑する二人は、美男美女のどう見てもお似合いの力ツプルだと思うのだが。

「兄貴が姫君とデートなんて笑っちゃうわよ。でも、いい揺すりのネタが出来たわ。榊、よく気付いたわね」

「あ、いや、うん、まあ、ね……」

少し詰まりながらとりあえず話を濁す。

義妹いもうとだからです、なんて言えるわけがない。言った時点で吉野の学園生活はいろいろな意味で終わる。

「あ、兄貴がどっか行つた」

「え？」

霧子の声に吉野が振り向く。

氷室は観月に何かを伝えたと、すぐそばにあるトイレへと向かつていった。なるほど、美男でもトイレに行くというわけだ。

その間観月は一人、雑貨店の前にいるらしい。何かを考えるようにして立っていた……が、彼女はあたりの男どもの視線に気付いていない。

氷室がいなくなったのを良いことに、あたりの男どもは観月に近づこうと画策していたのだ。

「兄貴、あいつバカじゃないの」

「なんで？」

「姫君を一人にしたら、男が群がるに決まってるのに」

「……げ」

一瞬のうちに、観月の周りには十人ほどの男が群がっていた。それぞれがこの美少女を口説こうと躍起になっている。

「あー、でも姫君は断ってるわね」

「ほんとだ」

「ごめんなさい、と言うように礼儀正しく頭を下げ、観月は男どもの申し出を断っていた。

その態度に潔く引く男たちがほとんどだったのだが、世の中にはしつこい男たちもいるわけで。

「いいじゃん、君さ、俺たちと楽しもうよ」

「すみません。わたし、お付き合いしてる方が……」

「見てた見てた。でも、君を放っておくような男だろ？ だったら

俺らが楽しませてあげるから」

「そうそう。一緒に行こうぜ」

下卑た笑い声を上げ、いかにも頭の足りてなさそうな軽い男三人組が観月に絡んでいた。

観月は断っているのだが、一向に退く気配はない。

困り果てる妹の姿を見、吉野は飛び出すか飛び出すまいか考えあぐねていた。

ここで飛び出せば霧子に色々と疑われるだろう。だが飛び出さなければ妹がピンチだ。

自分の今後の学校生活は大事だ。だが妹も大事だ。どうすればい

い！

「いいじゃん、俺たちとさ」

「いえ、お断りします……」

「……はあ、口で言ってもわからないなら……っ」

「きゃ……！」

男の一人が無理矢理に観月の腕を掴む。

その時点で、吉野の気持ちは一つに決まった。

怪しまれたって良いじゃないか！ 妹を守るのは、兄の役目だ！

勢いよく立ち上がり、驚く霧子を尻目に吉野は駆けだした。

よくも俺の妹に手を出してくれやがって、絶対ぶちのめす！

心に決めて、吉野は走る。後二十メートルもあれば、観月の元にたどり着く。

「待ってる観月いつ！」

「待て、榊」

「ぐっ！」

肩を勢いよく掴まれる。氣勢を削がれた形の吉野が怒りを込めた目つきで振り返ると、親友、三井恵祐がいた。

「三井ッ？ ええい、なんでいるんだとかそっいつのはどうでも良い、離せ！」

「榊よ……たとえ一人でも我らが黎桜の姫君を守ろうとした貴様の男気に報いようではないか」

芝居がかった口調で、恵祐が言う。

「ここからは任せてもらおうか　我らKFCにな！」

『応！』

「なっ……！？」

恵祐の声に、ショッピングモールを歩いていた客たちの声が応える。

神楽坂観月ファンクラブ、通称KFCの会員たちは、一般客に紛れ込んで観月の側にいたのだ。

「諸君、我らは会長の命、及びKFC設立理念に基づき、あの不埒な輩を殲滅する！　総員私に続けえっ！」

『応ッ！』

恵祐の檄と共に、三百六十度あらゆる方向から観月を守るべくKFC会員がチャラ男三人組に突撃する。

その様子は圧巻であった。

一瞬にして三人組は百人以上いると思われるKFC会員たちに取り囲まれ、ぐるぐると縄巻きにされ、何人かのKFC会員によって担がれていったのだ。所要時間およそ十秒。

吉野は呆然と立ち尽くしているしかなかった。

「さっすがKFCってとこね」

「うおっ？」

横からの声に吉野は飛びずさる。いつの間にやら霧子もやってきていたらしい。

霧子はどこか咎めるような目で吉野を見ていた。

「デート中なのに、他の女の子の元に走るとはどういうことかな？」

「あ、いや、それは……ごめん」

「まあ、良いけどね。姫君を守ろうとするのは、黎桜の生徒なら当然の行動だし」

「ごめん……」

「それより気になるのは………何で榊が姫君を呼び捨てで呼んだのかってことね」

ニコニコと清々しい笑みで霧子は吉野を見つめる。あの声は聞こえていたらしい。

「あー、それは、あはは……」

「……ま、良いわ。いずれわかることでしょうしね。………って、もうすぐ映画が始まっちゃうわよ。急ぎましょ」

「うん………ってえ！？ 氷室さん！？ 手、手！？」

「え？ これくらいで顔を赤くしてどうするのよ。デートなんだから、当然でしょ？」

吉野の手を握り、霧子が駆け出す。

吉野は顔を真っ赤にしたまましどろもどろでいたが、前を向く霧子の顔も同様に赤くなっていた。吉野が気付くことは、ないのだが。

映画館は当然のごとく暗い。

スクリーン近くは明るいが、割と後ろの席に座っている観月には、隣の氷室の顔すら満足に見えなかった。

「さきほどは、すみません……。私が目を離したせいで」

「うつん、大丈夫……。KFCの人が守ってくれたから」  
「そうですか。会長に大事がなくて何よりです」

ほっ、と氷室が安堵の溜息を吐く。

観月はそんな氷室を横目で見つつ、とある人物のことを考えていた。

いかにも軽い男三人組に絡まれた時耳に入った、自分の名前を叫ぶ声。

間違えるはずはない、あれは吉野の声だ。

私を助けようとしてくれたんでしょうか。

そう考えると、ちょっと嬉しかった。

他の人とデートしているのに、自分のことを考えてくれた。

それだけで、観月は今まで吉野と距離を置いていたことが馬鹿らしく思えてきた。

兄さんは、私のことを考えてくれていた。それだけで、今は十分ですよ。

それは家族としての思いかもしれない。いや、きっとそうだろう。だけど、吉野が自分のことを考えていることに変わりはないのだ。

ちゃんと、兄さんに謝りましょう。

今までのこと、しっかりと謝らなければ。氷室もそうだ。無理矢理付き合わせてしまったことを、詫びなければ。

観月が決意した時、映画が始まった。



夕飯時の榊家。毎度毎度いつものように吉野と観月は向き合って夕飯を食べていた。

心なしか観月の顔は明るい。

「観月、幸せそうだな」

「はい、とっても」

「そっか、良かったな」

今まであまり表情が優れなかったように思っていた観月が、満面の笑みを返してくれたことで吉野も少し嬉しくなった。

元気になったなら、それでよしだ。

「……今日、男の人に絡まれたんです」

「……そ、それは災難だったな」

観月の言葉に吉野は言葉を詰まらせる。

別にあのとき自分がそこにいたと言っても良いのだが、なんだか言い出すのは難しく思えた。

「でも、KFCの皆さんが助けてくれました」

「それは良かった。お前が無事なら万々歳だな」

「けど、その前に、誰かがわたしのことを助けようとしてくれたみたいなんです」

「あ、はは……」

「誰かはわからないけど、凄く嬉しかったです。だから私、今凄く幸せな気持ちなんですよ」

にっこり笑って観月は吉野を見た。

吉野は明らかに狼狽えており、いかにもそれは自分ですと言っているような態度である。

そんな吉野を見て、観月は胸の中で微笑んだ。

本当に嬉しかったんですね。

こうして、榊家には観月の笑顔が帰ってきたのであった。

## 第五話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！ というわけで第五話ですが……正直、今までの話で一番微妙だと思います。

KFCの出番は少ないし、描写は全然ダメダメだし。もっと練習の余地があるということですけどね。

さて、今回はなんと六千文字突破です。そのうち半分が吉野と霧子の絡みなんですけど、まあ霧子は自分でも気に入ってるキャラなので、贔屓です贔屓。

しかし氷室と恵祐の存在感がないなあ……。次回は恵祐も活躍する予定です。

というわけで毎度おなじみ次回予告です。

### 次回予告

デートは終わった、が、吉野にはまだ仕事があった。

霧子の同人誌のモデルという大役。三井と絡めと言われる吉野だったが、「男と男は嫌だ」と反発する。

だが霧子はその言葉を待っていたかのようにこう答えた。

「じゃあ、女装しかないわね」

かくして、霧子と女装した吉野と三井を巡るドタバタ劇が始まる！

次回、『吉野女装編』開始！

お楽しみに！

## 第六話

「うつわ……広……これ部屋？」

「まあね。私の交渉術さえあれば、多目的ホールを文芸部室にすることなんて訳ないのよ」

多目的ホールと書かれたプレートの下にある扉を開け、感嘆の溜息を漏らした吉野を見、霧子は得意げに笑った。

日は榊家の人間と氷室家の人間、果てにはKFCを巻き込んだあのデートから一週間。吉野に、ついに地獄の時間が訪れようとしていた。

多目的ホールはその名の通り様々な目的に応じて使用できるように、人が二百人近くは入れそうなスペースがあった。

だが吉野の記憶にある多目的ホールと少し違うのは部屋の中心あたりに、何かを隠すようなカーテンが垂れ下がっていることだろうか。

吉野を先導して歩く霧子はカーテンが引いてある部屋の中心まで向かい、それを勢いよく引いた。

中にある物が吉野の瞳にも映る。

「……」

中の物を見た瞬間、吉野は絶句した。

疑似クローゼットとでも言うのか、そこにあるのは種類は様々色とりどりによりどりみどり、素晴らしきかな沢山の衣装であった。驚いて固まる吉野に顔を向け、霧子は天使のような笑みで囁く。

「これ、全部着てもらうから」

「……いやあああああああああああ！」

吉野の絶叫が、黎桜学園に木霊した。

「ちょ、ちょっと氷室さん……これ本気で着ろっていうの……?」  
「当然じゃない。……うゝん、柎には何が似合うかな……。メイド服……はたまたチャイナ服……」  
「……」

吉野にとっては非常に迷惑だが、霧子はとても幸せな悩みに頭を抱えていた。

ニヤニヤとだらしのない笑みを浮かべつつ、両手はワキワキと気持ち悪く動いている。

そんな彼女の姿に少し引き気味な吉野は、改めて部屋の半分以上を埋め尽くす衣装の数々を見た。

メイド服やチャイナ服、巫女服にスク水……これ以上見ると精神が崩壊しかねない。極力視界に入れないよう、吉野は目を背けた。そして彼は一つの結論に辿り着いた。

安請け合いするべきじゃなかったかもしれない。

吉野が本気で自分の選択を後悔しはじめた頃、入り口の扉が音を立てて開かれた。

「……遅くなった」

「あ、来た」

霧子の声につられて吉野も入り口を見やる。

入り口に立っていたのは、長い黒髪が映える美少女だった。

しかし、観月とは逆ベクトルの美しさというのだろう。彼女は人を寄せ付けないような雰囲気纏っている。

無表情、だがそれでいて美しい。観月が咲き誇る向日葵ならば、彼女は谷底で、だが静かに花を開く白百合に喩えられる気がした。

「……その子は……？」

「紹介するわね。彼女は私の同胞、文芸部の副部長である神宮寺明<sup>あすか</sup>日香よ。生徒会副会長だから、見た事くらいあるでしょ？」

「あ、そういえば」

「……よろしく」

小さく、明日香が会釈をする。吉野も会釈で返した。

「さて。明日香も来たことだし、いい加減始めましょうか」

「何を？」

「しらばっくれても無駄」

「……柊は、モデルになるという条件で霧子とデートに出かけたはず……それなら、拒否権はない」

洪る吉野に、いつの間にか近づいていた明日香が諭すように口を開く。

ゆっくりと、だがしっかりとした声で話す明日香に、吉野は首を縦に振るしかなかった。

というか。

自分たちのデートの話を知っていたのかと吉野は少し照れくさくなった。

それから彼は彼にとってまさしく地獄だった。

吉野は確実に男としての尊厳を失った。霧子と明日香の二人がかりで制服をひん剥かれ、下着を見られ、そして沢山の衣装を着せられたのだから。

まずはメイド服。紺と白のコンストラストが美しい。控えめな色だが、化粧まで施した吉野、果てにはセミロングのウィッグを装着したことであり得ないほどの色気を醸し出していた。

「さ、榊がここまでのポテンシャルを有しているなんて……！」

「同じ女として、嫉妬する……」

「いや、俺女じゃないよ！？ 大丈夫だよね神宮寺さん！」

次はチャイナ服。少々派手気味な赤色。しかしそれよりも何よりも、スリットから覗く美しい生足が霧子と明日香の目を離さなかった。

「こ、これは……！」

「……同じ女として、自信がなくなる……」

「だから俺女じゃないって！ 気付いて！」

茶番はまだまだ続く。

お次は体操服（ブルマ装着）である。

顔を真っ赤に染め、恥ずかしそうに体操服の裾でブルマを隠そうとする吉野の姿に、霧子は鼻血が流れ出るのを押さえきれなかった。

「……これは、もう、生物兵器ね……」

「……同じ女として、尊敬する」

「だから俺は女じゃないってのにいいッ！」

一通りの衣装を着た後 驚くべき事に、文芸部室にある衣装は

近隣の女子校の制服まで完璧に網羅してあった　　神経を磨り減らした吉野は弱々しく口を開いた。

「……ねえ、氷室さん。俺は同人誌のモデルって話を聞いたんだけど……これじゃあ俺のコスプレ大会じゃないか……」  
「だって……榊が可愛すぎるんだもん……」  
「……」

いつの日と同じように、顔を真っ赤に染められる。  
男としてそれはどうなんだろう、と少し悲しくなりながら、吉野は明日香に話しかけた。

「あの、神宮寺さん。とりあえず、服を脱いでウィッグも外したいんだけど」  
「……霧子が壊れた以上仕方がない……。でも……最後に、こちらの指定したウィッグで黎桜の制服を……」

懇願するような目で、明日香が言う。  
基本的に女性に押されると弱い吉野だ。勝手に首が縦に動いていた。

「……!」  
「凄い……これはどこをどう見ても黎桜学園の女子生徒……!　會長に、匹敵する……!」  
「いや、これは……ううむ……」

鏡に映る自分の姿を見て、吉野は溜息を吐いた。  
自分で言うのもなんだが、これはかなり可愛い。  
サイドでちょこんと揺れるお下げに、まだ大人と言えるまでには成長していない可愛い顔。



背も言うほど高くはなく、すらっと伸びた足、スカートとニーソックスの間から覗く絶対領域はかなり魅力的だ。

今の自分の姿を見て、一目惚れする人間がいてもおかしくはない気がした。

何せ自分自身が一瞬とは言え惚けてしまうほどなのだ。美少女として名高い神楽坂観月を見慣れているこの自分が、だ。

「……ま、中身が男じゃなけりやだけどね……泣きたいよ……」

「……霧子は既に倒れてしまっている……。それだけの、破壊力が……」

「……えっと、神宮寺さん？ そろそろ脱いでも良いかな、これ」

床にうつぶせで倒れている（ずいぶんと幸せそうな顔であった）霧子の傍らに立つ明日香に、吉野が問うた。

「……ふふ、そうはいかない」

「え」

「霧子が倒れた以上、榊の処遇は文芸部副部長である私の裁量に委ねられる。……解放は、しない」

「いやだあああああああああ！」

「あ、榊……！」

だが流石に吉野にも限界はあったのだろう。

彼は奇声を上げた後二人には脇目もふらずに多目的ホールから走り出てしまった。

……女装したままで。

「……これはまずい事になったかもしれない……」

「と、とにかく家に帰ろう！ 鞆……は多目的ホールか！ いいや、明日取りに行けば！」

ずんずんと大股で廊下を闊歩する。

今は一刻も早く家に帰りたいかった。女装していた自分の姿を早く忘れたいという意味もあるのだが、しかし……、

「……やけに、視線が気になるな……」

『……おい、あの娘』

『あんな娘、いたっけか？』

『やばい、あれはやばいぞ……』

廊下で生徒達にすれ違う毎にひそひそと何かを囁かれる。

それは吉野の女装した姿が破壊力抜群だからなのだが、彼は気付いていなかった。

というより家に帰ることばかりを考えており、自分が女装しているという事実をすっかり忘れてしまっていたのだ。

（……何でみんなこっちを見るんだ？ まさか、女装していた俺のことを影で嘲笑っているのか！？）

吉野は未だ気がつかない。もうここまでくると鈍感以上の何かであらう。

「……」

「お、あれは……」

周りの視線を浴びつつ、昇降口への道をひたすら歩く吉野の視界に飛び込んできたのは親友、三井恵祐の姿であった。

ちょうど良い、と吉野は胸を撫で下ろした。鞆は暇そうな三井にでも任せて自分は一刻も早く帰宅しようというのである。

吉野は小走りに三井の元へと駆け寄った。

「みつつい〜！」

「ん、うおおっ!？」

「ふう、助かったよ三井」

破壊力満点の笑みで吉野は彼の腕を取る。

義妹いもうとと同じく、吉野もまた無自覚に人を萌え殺すという特技を持っているのかも知れない。

満面の笑みで腕を取られた三井は、ただただ狼狽えるしかなかった。

「え、あの、あなたは……？」

「何言ってるんだよ三井。俺だよ俺……そう、お、れ……はああああっ!？」

「え、どうしたの君！」

吉野はようやく気がついた。

ガラスに映る自分の姿、それは三井が見覚え無くて当然の、榊吉野が女装した姿であったのだから。

目の前の親友と、ガラスに映る自分を見比べ、吉野は頭を抱えた。

（まずい、これはかなりまずい展開だ……!）

何がまずいか。

今の自分の姿が女装した榊吉野だと知れば自分は女装癖の持ち

主だと勘違いされ、色々と悲しい学園生活を送ることになってしまうのだ。

それはどうしても避けたい。では、どうするか……。

（偽名でも使って、何とかごまかす……！）

「あの、君……？」

「ご、ごめんね三井くんっ！ あたし、片桐佳乃かたぎりよしのって言うの……。よ、よろしく、ね？」

「あ、ああ。よろしく、片桐……」

（ま、まずいますっ！ 怪しまれてる！ ていうか何で俺は自分の名前を使ってるんだ！）

「それで、片桐……。何か俺に、用でも？」

「そ、そうなのっ！ えっとね……その、付き合っつきあって欲しいの！」

「え、それは……！」

（待て俺、何言っいてやがるうう！？ 役に入りすぎたとか、そう言う問題じゃねえっ！ 何でわざわざピンチを招くんなんだ！）

人間、ピンチになると思いも寄らない行動を起こすものである。  
今の吉野はまさしくそう言った状態に陥おとっていた。

「え、その、いきなりそういうことを言われても……。いや、片桐の気持ちは嬉しいんだ……。けど、俺は」

「そう、そうだよね……。ごめんね三井くん……。いきなり、変な事言っいて……！」

「ま、待っまちてくれ佳乃ちゃん！」

「さよなら！」

「よ、佳乃ちゃん！」

必死に手を伸ばし、走り去る吉野を引き留めようとする三井。  
だが、彼の想いは届くことなく、稀代の美少女片桐佳乃は姿を消

したのだった。

(……な、何とか逃げ切ったが、これは色々とまずい状況だ……早く帰ろう！)

軽く青春映画のワンシーンを演じきったバカ　もとい榊吉野、  
改め片桐佳乃　は昇降口へと走った。

あの意味のわからない告白は気の迷いだと自分を納得させ、昇降口へと走る。

「よし、出口！」

下駄箱から靴を取り出し、ゴールである昇降口へ

「逃がさない」

「じ、神宮寺さんっ!？」

「私もいるわよ？　勝手に逃げようなんて、そうは問屋が卸さないんだから」

「ひ、氷室さんまで……!」

出口に待っていたのは、妖しく微笑む氷室霧子と、神宮寺明日香の両名であった。

(……ゲームオーバー……かなあ……)

吉野は、力なく項垂れるのであった。

## 第六話（後書き）

目指せ妹系ラブコメ！

てなわけで「義妹は生徒会長！」第六話です。

三ヶ月ぶりに登場、更新が遅くなり申し訳ございません。

自分の書く文章に自信が持てなくなり、なおかつ納得のいける文章が書けなかったために三ヶ月も読者の皆様をお待たせしてしまいました。

しかも三ヶ月かかったこの話、非常にクオリティが低く、少し落ち込み気味です。

この不調を抜け出すため、近いうちに別の作品を投稿することになるかもしれませんが、そのときはどうぞよろしくお願いします。

いや、義妹もやりますよ、ええ。

……頑張ります。

ところで、初登場の神宮寺明日香嬢は前作からのゲスト参戦です。

前作をご存知の方が「おお」と思ってくださいれば幸いです。

前作でも一番人気でしたしね。

\*

### 次回予告

片桐佳乃から急な告白を受け、そのまま姿を見失ってしまった三井恵佑。

彼の心は、観月と彼女の間で揺れ動く。

果たして彼の想いは届くのか！

次回も吉野女装編！

\*必ずしも次回予告が次回の内容と合致するとは限りません。

## 第七話（前書き）

どうも、羽賀です。

今回は多少下ネタが入っておりますので、お嫌いな方はご注意ください。

## 第七話

「あの……三井くん！ 私、キミのことを想うと、もう……」

耳朶になつとりと絡みつくように、いつか聞いた彼女の声が再生される。

サイドでちょこんと揺れるお下げ。茶色がかったその髪は、彼女の動きを追従するかのように可愛らしく動く。

まだ大人と言えるまでには成長していないが、個々のパーツが完全なバランスで出来上がった芸術品と呼んでも過言ではない可愛らしい顔。

背の丈は言うほど高くないが、そんなこと問題ではない。むしろ背が低い方が自身にとっても好みである。

膝よりも少し上のスカートから、すらっと伸びた白磁のような美しい足。その透き通るような肌とのコントラストが映える黒いニーソックス。

そして、昇降口に駆けていった後ろ姿に、少しだけ見えた黒い下着。

無理して大人の階段を上ろうとしているような、それでもやっぱりそこが魅力な彼女の名は……、

「……片桐、佳乃ちゃんか……」

「ひゃうっ！」

「うおわっ、何女みたいな声出してんだよ、榊」

あの突然の告白から一週間が経って。それでも三井の脳裏から、あの可憐な少女の影が失せることはなかった。

むしろ近頃、脳内メモリの容量を圧迫しかけているのが実情である。彼女のことを考えれば考えるだけ、切なくなる。



そう、それはまさしく恋であった。恋。三井恵祐は、片桐佳乃に恋をしていた。

それが、今自分のすぐ近くにいる親友、榊吉野の女装した姿であるとは露知らず。

一方の吉野はのんびりとした時間を過ごせる昼休み、学食での時間、友人の口から飛び出た単語に胃が締め付けられる思いだった。

片桐佳乃、と言えば。

(……あの女装騒ぎのか……)

思い出すだけでも寒気が走る、同人のモデルとは名ばかりの榊吉野限定コスプレショーの事を考える。

文芸部、もとい腐女子部がリーダー、氷室霧子と同じく副部長、神宮寺明日香の笑顔を思い出すだけで、吉野は背中が栗立つ気がした。

要するにそれだけのトラウマを植え付けられた、とそういう訳である。

「……なあ、榊」

「な、何だ……」

つい先ほど、自身の嫌な思い出を憂いげに呟いていた友人からの呼びかけに多少警戒しつつ、吉野は震える声でそれに応えた。

「この学校に片桐佳乃って女の子は、いるのかな」

「さ、さあなあ？ い、いてもおかしくはないんじゃないか、うん」  
「だよなあ……。でも、見つからないんだよなあ……」

探したのかよ、と思わずツツコミそうになって、吉野はすんでの所で踏みとどまった。

ツッコんでしまったが最後、片桐佳乃という女生徒との関係を尋ねられ、そこから芋づる式に片桐佳乃〓榊吉野という方程式が導き出されるということは予想に難くない。平穏安寧な学生生活を送ることが目標の吉野に、また新たな懸案事項が増えたのである。目下最大の懸案事項は義妹の神楽坂観月との関係ではあるが。

「……なあ、榊」

「何だ……」

「生徒会なら、全生徒の事把握してるよな。まして神楽坂会長なら」

三井の問いかけに、吉野は首肯した。

彼の義妹、<sup>いもつと</sup>黎桜学園が生徒会長神楽坂観月は、おそらくこの学校の中で最も『完璧』という言葉に近い人物だろう。

それは、普段一つ屋根の下で暮らしている吉野が一番よく知っている。

「そっか。そうだよな。……それじゃあ、行くか」

「どこに？」

「会長に、尋ねるんだよ。……佳乃ちゃんについてな」

「……」

三井の言葉に、吉野の思考はいったんフリーズした。

そのため、彼の行動を止めるタイミングを見計らうのに失敗、そのまま彼のアホな行動を容認するに至ってしまう。

「……こりゃ、本格的にまずくないか……」

意気揚々と教室へ向かう三井の後ろ姿を追いながら、目の前が真っ暗になるような感覚を覚えた吉野は呟いた。

ああ母さん……いよいよもって俺の学園生活はまずいかも知れま

せん。

全ては私に似てしまったがための悲劇ね、おほほほほ。

海外にいる幼顔な母親の声が聞こえた気が、した。

現在昼休み、教室で友人たちと談笑している神楽坂観月は模範的な生徒であり、模範的な義妹いもことでもあった。それは、先日とある友人から譲って貰った高性能小型集音マイクを、義兄あにである榊吉野の制服に縫い付けるほどに。これは決して、観月が『あなたがいない世界なんていけない』的な性格を持つ少女であるからという訳ではなく、単にここ一週間でため息の増えた義兄あにを心配しての行動である。そう、決して、断じて、間違いなく、いつでも吉野の声を聞きたいだとか、同年代の男子が集まれば必ず発生する気になるクラスの女子談義における吉野の発言を逐一チェックしたいだとかそういう邪な考えの基に起こした行動ではないのだ。あしからず。

というわけで、観月の右耳に装着されている小型イヤホンには、吉野と三井の会話が余すところ無く流れ込んできていた。

（片桐……佳乃さんですか……）

よしの、と聞いて観月の脳裏に真っ先に思い浮かぶのは義兄あに榊吉野であるのだが、それは間違いなく正解である。

だが、佳乃が女装したという事実を知らない観月にそんなことがわかる訳もなく、真面目な彼女は頭の中で片桐佳乃という人物のデータを探し始めた。

「神楽坂さん！」

「あ、どうしたの、三井君……。それに……榊、君」  
「どうも。あはは……」

自分の元に現れ、いきなり目の前で土下座を始める三井に少しだけ引きつった笑みを見せつつ、観月は挨拶を返した。主に吉野に。

「あの、この学校に片桐佳乃という女子生徒は在籍しているのでしようか……！　どうか、教えて下さい！」

「あ、あの三井くん？　別に土下座なんかしなくても……」

「ああ、有り難きお言葉！　胸に染みます……」

オーバーな受け答えに吉野は苦笑し、観月をちらっと見た。

「っ……」

「あ……」

視線が交差して。

二人は言いようのない微妙な間の後、どちらからともなく視線をずらした。

ちなみに三井は未だ土下座を続けたままである。

「それで、会長！　どう、なんでしようかあああつ！　いるのですようか、片桐佳乃ちゃんはあるあああ！」

「えーっと、その、ね？　私の記憶だと、この学校にそんな子はいない、よ？」

「え」

その時、吉野と観月は見た。

三井の体が漫画よろしく白化し、そしてヒビが入るのを。

（……オーバーだな……ていうかヒビ？）

（お、オーバーですね……これは、ヒビでしょうか？）

無駄なところでも思考がシンクロする二人である。

「……俺は、もう……心の汗が止まらねえよ……。俺の見た佳乃ち  
ゃんは、幻だったのかよ……」

「おいおい泣くなよ……」

「希望を持つて、ね？」

「あのー、ちよつといいかしら？」

吉野と観月が、背後からの声に気がついたのは、男泣きに泣く三井を宥めている最中であつた。

その声に吉野は体を強ばらせ、観月は少しだけ不機嫌な顔を見せる。

声の主は、モデルのように凜とした佇まいに、妖艶な微笑を湛えた、腐女子部長こと氷室霧子その人であつたのだ。

「氷室さん、ですよ……？」

何かを逡巡した後、観月が口を開いた。

傍からはわからないが、彼女の警戒レベルはぐんぐんと跳ね上がっている。

「そうよ。ちよつと榊に用事があるんだけど、良いかしら？」

そんな観月に返す霧子の声も、いつもと変わらないようでその実数段トーンが低い。

心なしか、その笑みも引き攣っているように見える。

「それはちよつと、ダメですね」

「あら、どうして？」

「榊君と私は、今大事な話の最中ですから」

何故か観月と氷室の間に流れる冷たい空気　言うなれば第二次世界大戦を終えた後のアメリカとソ連のような関係である　を感じ、疑問符を頭上に掲げる吉野であった。  
気づけ、これはお前のせいだ。

「とはいっても、こつちも結構大事な話なのよねえ……。榊と、そこで泣いてる三井も必要なんだけど」

「ごめん、俺トイレに行ってくるね！」

自分と三井の指名。ロクな事にならないと直感した吉野は教室を出ようとするのだが。

「逃がしは、しないから……」

「いやああああああ」

「副会長まで……？」

吉野は教室の出口で待ち構えていた黒髪の美少女に捕まってしまった。

流れるような黒髪に落ち着いた佇まい。純和風という言葉が一番しっくり来る彼女もまた腐女子部の一員、神宮寺明日香である。

「というわけで、ごめんなさいね、会長さん。榊と三井、借りるわね」

「それなら私も、連れて行って下さいませんか？」

「それは、難しい相談かなあ」

にこやかに笑う観月と霧子であるが、その交差する視線の間では火花がバチバチと散っているように見えた。観月も霧子もあのデート事件から、あまり面識がないにも拘わらず、互いをライバル視していたのだ。

観月は吉野の初デートのお相手という美味しいポジションを奪った霧子に。

霧子は自分とのデート中にも拘わらず吉野が体を張って守ろうとした観月に。

「っていつか氷室……俺もかよ」

いつの間にか復活した三井が、親しい友人と話すような口調で霧子に言った。

「そうよ。教えたでしょ、アンタと榊の、素晴らしい、隠微で、インモラルで、それはもう二人とも粘つくように、絡み合って、それで、それで……」

「氷室さん、鼻血。鼻血」

「きゃっ、と、とにかく！　そういう訳で、来なさい三井！」

自身が興奮して鼻血を出すような、なんだか想像するだけでも嫌気が差す同人のモデルになれと言われてなる訳無いよなあ、とぼんやり吉野は考える。なお、すぐ隣の観月はその様を想像したのかほんのり頬を上気させ、「文芸部の部費、上げても……」などと、生徒会長としてその発言はどうなんだという台詞をのたまっていた。

頼むから止めてくれと吉野は思う。

「あのなあ、そんな事言われて俺が着いていくと思うの」

「ここに、アンタの生態を記録したノートがあるわ。ええ、それはもう逐一、細かく、いずれ何かの役に立つだろうと思って毎日欠かさずつけてきたノートがね」

「……お前、いくら幼馴染だからと言ってそれは卑怯……」

「小学五年の頃の話ね。……帰宅した三井は妙に上機嫌だ。何故かと言えば、道端で工本を拾ったからに他ならない。どうやらあの男、熟物でも興ふ」

「よし、今すぐ俺と榊が絡み合えば良いんだな！？ ついでに言い訳させて貰うとそれは女物じゃなくて未人物だ！」

どっちでもあまり変わらない気がするなあ、と、その場にいた誰もが思った。

「というか三井、お前氷室さんと幼馴染なのか」

「ああ、そうだ。信じられないが、これが本<sup>リアル</sup>当だ。現実だ。三次元なんだ。可愛くて世話焼きで毎朝二つの意味で起こしに来てくれるような幼馴染は存在しないんだ」

「悪かったわね、可愛くなくて世話焼きでもなくて毎朝起こしに行かなくて。頭は覚醒してなくとも片方は起きてる物だと思ってたから」

（……何故氷室さんはここまで下ネタ耐性が強いんだ？）

吉野の疑問も尤もではあるが、ある程度耐性がなければ同人、それもインモラルな関係について深入りすることなど叶うまい。ちなみにすぐ隣の観月は首まで真っ赤になっていた。大方吉野のことを想像したのだろう。



「それにね三井。これはアンタにとっても悪い話じゃないわ」

ニヤリ、と口の端をつり上げるようにして霧子が笑う。絵にはなるが、この笑みを向けられたいとは思わない、そんな笑みである。まさしく悪魔の笑み。小悪魔スマイルとかそんな物を超越した代物である。

「アンタ、片桐佳乃って娘を捜してるんでしょう？」

「何故それを……彼女は、彼女はどこにいるんだ、教えてくれ氷室！」

「あ、神宮寺さん、俺トイレに」

「逃がさない」

危険を察知した吉野が逃げようとするものの、それは叶わない。しかも明日香は、両手でがっしりと、まるで大事なものを抱きしめるかのように吉野の腕を握った。

ということは必然的に二人の距離は近くなり、明日香の、小降りだが形の良い双丘が吉野の腕に、制服越しではあるが密着する形となる。

当然健全な青少年である吉野はその事を明日香に伝えるのだが……、

「……あの、神宮寺さん……」

「……当ててんのよ」

（いや、無理してそんな台詞言わんでも！）

さて、この光景を見ていた観月はいえ……。

（……！ ふ、副会長、破廉恥です破廉恥です破廉恥です！ い、いけません……！ 兄さんが、兄さんがああ！）

自身が裸エプロンで突撃したり風呂に乱入したことはすっかり忘れてしまったような口ぶりで、明日香の行動に心の中でツッコむのだった。

「……で、どう？ 決めたの、三井」

「ああ、約束は守れよ」

「当然」

霧子が、片目を閉じて微笑で応じる。

長年見慣れたその仕草も、中々様になっているなと思う三井であった。

そう、この時をもって三井恵祐と氷室霧子の契約は完了したのだ。先ほどまで拒否気味な姿勢を見せていた三井は、何故か爛々と瞳を輝かせている。

もうそれだけで吉野にとっては死刑宣告に等しいのだが……、

「榊」

「……あーもう、わかったよ……」

「そうか、俺のために潔く脱いでくれるか」

「って、何でそうなるんだよおおっ!？」

かくして、榊吉野の受難はまだまだ続くのであった。

## 第七話（後書き）

目指せ妹系ラブコメディ！

というわけで第七話です。

……明日から期末考査なのにこんなことやってる場合じゃないんですよねえ……。

まあとにかくとして、今回も難産でした。自分の書きたい文章が書けない！ これはもう経験をつむしかないんでしょうけど……。  
今回の次回予告は都合によりパスです。それでは。

幕間劇・義妹が出来た日 前編（前書き）

前日談です

## 幕間劇・義妹が出来た日 前編

朝起きたら、布団の中に女の子がいた。

何を言っているのかわからないかもしれないけれど、とにかく、女の子がいた。

すうすうと小さく、可愛く寝息を立てている女の子は自分と同じくらいの年だった。

「……な、な、なにがっ!？」

自分の身に降りかかった謎の事態に、僕の頭は上手く回転しなかったようだ。

処理落ちを起こし、思わず布団からスパイダーウォークで逃げ出してしまった。『エクソシスト』のやつ。まさか僕にこんな特技があるとは。

けれども、頭を見事に筆筈に打ちつけたので、僕は痛む頭をさすりながらそろそろと立ち上がった。寝ている彼女を起こしちゃいけないような気がしたのだ。

ゆっくり、息を殺しながら、僕は自室のドアを開ける。ゆつたり、慎重に部屋を出た僕は、話し声の聞こえる階下にダッシュで向かった。

こんなおかしいことをするのは、母さんか、兄さんか姉さん……もしくはその全員しかない。

「おい、あんたらああああっ!」

バンッ! と大きな音を立ててリビングの戸を開ける。

視線をやれば、そこにいたのは母さんと、兄さんと、姉さん。…そして、僕の知らない、おじさん。

みんなが大声を上げた僕を見て、そして笑い出した。

「ははは、驚いたか、吉野」

「当たり前だろ、明人兄さん!」

大声で笑いながら、遠慮なく僕の肩を叩いてくる兄さんを半眼で

睨みつつ、僕は叫んだ。

驚くも何も、布団の中に女の子がいたら驚くに決まってる。

大体、僕はもう中学一年生だというのに……。

年頃なんだ。間違いがあってもおかしくないってのに……。

「つてことは、襲わなかったわけか……意気地なしね」

「黙っててよ美郷姉さん！　つか、襲う襲わないの問題じゃないだろ！？」

この人たちの思考回路は、常に僕の予想の右上に行くから本当に困る。

「そうねー……襲うとか、襲わないとか、いけないわよねー」

「母さん……」

僕は始めて、目の前に座るこの童顔な母親がまともな人物に見えた気がした。

「あの子、吉野の妹なんだからねえ」

前言撤回、この人は何を言いやがりますか？

僕には出来の悪い双子の兄と姉がおりこそすれ、妹がいた覚えなんざございません。

はっ！　まさか　！

「母さん、不倫……そのおじさんは……愛人……！？」

「失礼な事言わない」

僕らのやり取りを柔らかい微笑を浮かべつつ見つめているおじさんを指差し、僕が言うつと、姉さんと母さんの鉄拳が降ってきた。

じゃあ誤解を招くような発言は控えてほしい。

「じゃあ、あの娘は何なのさ！　僕の布団の中に潜り込んだ、あの娘は！」

「だから、お前の妹だよ、吉野。僕たちの妹でもあるけどね」

僕の問いに、明人兄さんが答える。

「だったら、何であの娘が僕の妹なんだよ！　おかしいじゃないか！」

「……その問いには、私から答えさせてもらおうかな」

「……え……？」

そう言って、ゆったりと立ち上がったのは、今まで沈黙を貫き通していたおじさんだった。

皺一つないスーツをぴっちり着こなし、豊かな口ひげを擦りつつ、おじさんは優しい視線を僕に向ける。……この人、どこかで見たことあるような気がしなくもない。

数秒考えた後、この人が大企業、神楽坂グループのトップ、神楽坂皐月であることに思い至った。何でそんなすごい人が、こんなところに……？

「……吉野君、いや、吉野」

「呼び捨て……？」

「ははは、失礼。本題に入らねばね。……少し、昔話をさせてもらおう。よろしいかな？」

「はあ……。どうぞ」

マイペース極まりないおじさんに呆れた視線を投げかけつつ、僕は彼の話<sup>は</sup>に耳を傾けた。

長かったので省略するけど、曰く……。

『三年前、愛する人を失って失意のどん底に沈んでいた僕を支えてくれたのが、同じく愛する人を失って失意のどん底に沈みつつも、生きる希望を失うことなく素敵な笑顔を振りまいていた僕の秘書である君の母親だったんだ。僕たちは惹かれあつた、互いに。そしてまた新たな家族を作ることを決めたんだ。つまり、僕は君のお母さんと結婚するつもりなんだ。いや、むしろ既に届出は出している。つまりもう覆すことは出来ない決定事項なのでなんとも言えないけど、僕の一人娘皐月は君の義妹になるってことさ、H A H A H A !』

「……わかってくれたかな、吉野」

「……ええっと……その、なんていうか………」

僕は言いたいことが山ほどあった。勝手に再婚を決めた二人に対する文句とか、僕に相談しなかったことに対する文句とか、あの娘の名前は観月って言うのか、早く教えろって言う文句とか。

でも、そんなことよりも、言いたいのは……。

「母さん！」

「なに、吉野？」

「あんた、父さんを裏切る気かよ！」

父さんが死んで、五年と経ってない。それなのに、再婚だなんて。

「あのね、吉野……」

「父さんのことは忘れて、もう違う人にも乗り換えるってのかよ！」

母さんの馬鹿野郎！」

叫ぶだけ叫んで、僕は何も考えずに家を飛び出した。

寝巻きのままで走ってきたと気づいたのは、家から遠く離れた公園の中でだった。

続く



**幕間劇・義妹が出来た日 前編（後書き）**

更新遅くなって申し訳ございません。

実生活が忙しかったために、このような事態になってしまいました。  
次回はプール編です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5416f/>

---

義妹は生徒会長！【更新停止中】

2010年10月8日21時07分発行